

仏様のおはなし新シリーズ第76集 その2 「親鸞聖人の絶唱」

「正信念仏偈」は、親鸞聖人が開顕された浄土真宗の教えの中核と、その教えが親鸞聖人まで到り届けられた歴史を、感銘深く詠い上げられた宗教詩であります。

私たち真宗門徒は、この「正信念仏偈」をみんなで唱えようと定めてくださった蓮如上人から五百年の間、家族そろつて毎日お仏壇の前でお参りしてきました。気づいてみれば、毎日、親鸞聖人のご説法を聞いてきたのでした。

その「正信念仏偈」の末尾は、「道俗時衆共同心(どうぞくじしゅうぐどうしん) 唯可信斯高僧説(ゆいかしんしこうそうせつ)」と結ばれます。その意味は、「道人(出家者)も俗人(在家の者)も、この時代に生きるのはその難しい課題を共同する心で、ただこの高僧方の説かれる教えを信じ受け止めなさいよ。」です。

人間は誰しも、生まれ出た時代の課題や苦悩を背負っています。人間である以上、いつの時代であってもその時代の課題と苦悩から離れて生きることはできません。ただ、その時代の課題と苦悩を感じ取り、自分で担うことができるかできないかで、生き方が変わってしまうのです。

親鸞聖人は、末法濁世という人間が人間であることを見失ってしまう時代にあって、なお人間に生まってきたことの意味を問い合わせ、人間に生まれたことを成就しようとして悪戦苦闘されたのでした。そして、南無阿弥陀仏となつて人間に届いている阿弥陀如来の本願こそが、常に時代の課題と苦悩を解決する道であるとして、このお言葉を末尾に置かれたのであります。これこそ、親鸞聖人が私たちに向けられた絶唱であります。

今日の私たちは、国や民族同士の激しい対立や、同じ国の中にあっても同じ人間を自分の幸せの道具として扱おうとする差別と榨取のなかにいます。さらに入間でコントロールできない核・原子力やIPPS細胞など、科学技術の発展の果てに生み出されたものによって生命そのものが危機にさらされています。これらを解決する道は「正信念仏偈」のどこに詠われているのでしょうか。私は「獲信見敬大慶喜(ぎやくしんけんきようだいきょうき) 即横超截五悪趣(そくおうちょうぜつごあくしゆ)」を、その道としていただきます。阿弥陀如来の本願を素直にいただく「獲信」(信を得ること)によって、あらゆる命が仏の寿(いのち)を宿していると見え、だからこそ互いに敬いあいができるのです。決していのちを誰かの幸せの手段とはしないという世界が開かれるのです。その結果その時こそ(即)、利用し合い相互不信と命の奪い合いがもたらす五悪趣(即)地獄・餓鬼・畜生・人間・天上が、横ざまに超え截た(たた)れるといわれるのです。

この教えは、現代の日本にこそ完全に言い当てられたものです。

今回は、妙泉寺住職 木村眞昭が味わいました。

